法梅蓮の 教学試験発心教材① ／ 開目抄 序講篇 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

本抄の「背景」「題号」「大意」について、あとの問いに答えなさい。

問一　本抄の由来について記されている御文を、「種種御振舞御書」より選び答えなさい。

さて皆帰りしかば去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二巻造りたり、頚切るるならば日蓮が不思議とどめんと思いて勘えたり、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければ・たもたず人に魂なければ死人なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ、只今世乱れてそれともなく・ゆめの如くに妄語出来して此の御一門どしうちして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが如し、かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ（御書919ページ・開目抄講義上〈以下、『講義上』と称す〉13ページ）

問二　本抄がご執筆された背景について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

「開目抄」は、日蓮大聖人が佐渡流罪中の文永九年二月、五十一歳の時、配流地の塚原から四条金吾に託して、門下一同に与えられた書である。本抄は、日蓮大聖人こそが主師親の三徳を具えた存在であり、すなわち末法の御本仏であることを明らかにされた書である。翌・文永十年四月に著された「A観心本尊抄」と並んで、大聖人の仏法における重書中の重書となる。大聖人は、文永八年九月十二日、竜の口の法難に遭われ、その際にB発迹顕本されました。

佐渡は念仏者が多く、大聖人を阿弥陀仏の敵として、命をつけねらう者も少なくなかった。

また、鎌倉などの大聖人門下の人たちも、所領没収、追放、罰金などの刑に処され、疑いを起して退転する者が多く出るありさまであった。本抄は、こうした状況のなかで、世間や門下から寄せられた、「大聖人が法華経の行者であるなら、なぜ諸天の加護がないのか」などといった疑問に対し、法華経の経文通りに正しく実践すれば三類の強敵による迫害が起こるというのが仏の教えであり、その通りの難に遭っている大聖人は真の法華経の行者であることを示されている。

問三　先の文中のA［　　］について、この御抄の要旨を簡潔に答えなさい。

この「如来滅後五五百歳始観心本尊抄（にょらいめつごごのごひゃくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう）」は、大聖人が佐渡の一谷で述作された重書。末法の衆生が信受すべき本尊が南無妙法蓮華経であることを明かし、妙法受持により観心の義が成じ成仏できることが示されている。（講義上33ページ）

問四　先の文中のB［　　］について、文意に沿って簡潔に説明しなさい。

名字即凡夫という迹を開いて、内証に永遠の妙法と一体となった自在の御境地である久遠元初の「自受用報身如来」の本地を顕すこと。末法の全民衆の発迹顕本の最初の一人となられたのが日蓮大聖人であられる。大聖人は、御自身の発迹顕本を証明されるために、また一切衆生が発迹顕本するための明鏡として、御本尊を御図顕なされた。（講義上17・18ページ）

問五　本抄の題号を「開目」と名づけられた意味は、どのような意であられると拝されるか、簡潔に答えなさい。

日本国の人々が偏頗な教えに執着して、日蓮大聖人が末法の衆生を救う真実の三徳具備の仏であることを知らない「心の盲目」を開かせよう、との意であると拝される。（世界広布の翼を広げて　教学研鑽のために―開目抄８ページ）

問六　本抄の大意ついて述べられてる次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

本抄「開目抄」は、大きく「標」「釈」「結」の三段に分けられる。すなわち、初めに一切衆生が尊敬すべき主師親が主題であることを「標」し、次に儒家・外道・内道における主師親を「釈」し、最後に大聖人こそが末法の一切衆生を救う主師親であると「結」ばれている。

初めに、人々が尊敬すべきものとして「主師親の三徳」を示され、次いで、儒家・外道・内道で三徳を具えた者として尊敬されている人の教えを釈し、諸思想および釈尊の仏教の中の浅深を判じられ、法華経本門寿量品第十六の文底に秘沈されている「一念三千」こそが成仏の根本因となる法であることを示されている。続いて本抄の前半では、法華経の迹門・本門の教えを検証され、法華経にこそ、万人成仏の大法が示されていることを明かしている。

本抄の後半では、〝大聖人が法華経の行者であれば、どうして諸天の加護がないのか〟という世間や門下の疑問を取り上げ、これに答えられていく。

最初は、法華経の内容に即して二乗・菩薩・天・人が法華経に大恩があることを示し、〝彼らが守護の働き〟を現さないのは日蓮が法華経の行者ではないからか〟と疑いを強められていく。そのうえで、宝塔品の「六難九易」、提婆達多品の「悪人成仏と女人成仏」、そして勧持品の「三類の強敵」などの文を考察しながら、この法華経を末法に弘める法華経の行者が難を受けるのは経文の通りであることを論証される。そして、法華経の行者が難を受けるのは行者自身の宿業のゆえんであることや、迫害者に現罰がない理由を明かされている。また「三類の強敵」、特に第三の「僭聖増上慢」の姿を明らかにされ、不惜身命の決意をもって末法の衆生を救済するとの、末法の御本仏としての大誓願を示されるとともに、末法の法華経の行者の実践に具わる功徳と折伏の意義を教えられて不退転を勧められている。

最後に、この慈悲の実践のゆえに、大聖人こそ末法の人々を救済する「末法の主師親」であることを示して、本抄を結ばれている。

法梅蓮の

教学試験発心教材② ／ 開目抄 問答篇㈠ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり・・・・・これをいだけり」（186ページ-1行目～189ページ-3行目）の御文について、あとの問いに答えなさい。

問一 「主師親」（186ページ-1行目）について、具体的かつ簡潔にそれぞれ説明しなさい。

さらに、主師親三徳の考え方・宗教のあり方について、「革命的な転換」がなされている御文を、御書より選び答えなさい。

主＝人々を守る力・働き。（世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄〈以下、『開目抄』と称す〉15ページ-1）

師＝人々を導き、教化する力・働き。（同15ページ-1）

親＝人々を育て、慈しむ力・働き。（同15ページ-1）

問二 諸仏のなかで釈迦仏のみが主師親の三徳を具備していることを示されている御文を、御書より選び答えなさい。

御文＝凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり（「諸法実相抄」御書1358ページ-1・開目抄講義上〈以下、『講義上』と称す〉56ページ-1）

問三 「儒家には三皇・・衆生を度す」等云云」（186ページ-1行目～188ページ-5行目）の大意について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

儒家などの中国の諸思想の教えは、［今世］に限られていて、［三世］にわたる［生命観］を欠くため、［永遠］の［真］の［幸福］は得られないという限界を示されている。その一方、これらの教えは「［仏法］の［初門］」であるとされ、仏教が広まるための導入の意味をもっていたことを明かされている。

さらに、バラモン教などの［外道］において、一応、［業］や［輪廻］を説いて［三世］の［生命観］を立ててはいるが、［幸・不幸］を決定する［生命］の［因果］については正しく説き明かしていないことを示されたいる。その結果、［輪廻］の［生死］の［苦悩］からは脱せないと指摘されたいる。また一方で、これらの思想・哲学が仏教へ至る入口となっていることを指摘されている。

問四 「嬰児」（188ページ-7行目）・「大人」（188ページ-12行目）は、それぞれ何を譬えたものかを、本抄より選びそれぞれ答えなさい。

嬰児＝外典・外道の四聖・三仙其の名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫（御書188ページ-1・開目抄22ページ-1）

大人＝一代・五十余年の説教は外典外道に対すれば大乗なり（御書188ページ-1・開目抄24ページ-1）

問五 「但し仏教に入て・・て懐うべし」（188ページ-14行目～18行目）では、どのようなことを明かされているか、具体的かつ簡潔に答えなさい。

釈尊の教えの中でも、大きく大乗教と小乗教の違いがあり、大乗教の中でも実教と権経の違いがあることを示され、法華経こそが、釈尊自身、また多宝如来、十方の分身の諸仏が真実と定めた教えであることを明かされる。（開目抄28ページ-1）

問六 「未顕真実」・「要当説真実」（188ページ-16行目）をそれぞれ簡潔に説明しなさい。

未顕真実＝無量義経（法華経の開経）説法品第二に「四十余年には未だ真実を顕さず」とある。（法華経29ページ-1・開目抄28ページ-1）

要当説真実＝法華経方便品第二に「世尊は法久しくして後 要ず当に真実を説きたまうべし」とある。（法華経111ページ-1・開目抄28ページ-1）

問七 「此の経に二箇の大事あり」（189ページ-1行目）について、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

迹門の諸法実相・十如是や二乗作仏によって示された「迹門理の一念三千」（開目抄32ページ-1）

本門の久遠実成によって指し示された「本門事の一念三千」（同32ページ-1）

問八 「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」（189ページ-2行目）を、三重に冠して答えなさい。

権実相対＝但法華経（開目抄33ページ-1）→「迹門の理の一念三千」（講義上64ページ-1）

本迹相対＝但本門・寿量品（開目抄33ページ-1）→「本門文上の事の一念三千」（講義上64ページ-1）

種脱相対＝但文の底（開目抄33ページ-1）→「文底事行の一念三千」（講義上64ページ-1）

問九 「天台智者のみこれをいだけり」（189ページ-3行目）について、天台の「摩訶止観」の一説を引用している御文を、「観心本尊抄」より選び答えなさい。

夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り（御書238ページ-1）

法梅蓮の

教学試験発心教材③ ／ 開目抄 問答篇㈠ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

問 「**一念三千は……那由佗劫なり**」等云々」（189ページ4行目～197ページ9行目）の御文の大意について述べられている次の文中の［　］にあてはまる語句を答えなさい。また、［A］にあてはまる法華経の経文を、本抄の御文を参考に答えなさい。

◆「一念三千は…次上の心なり」（189ページ4行目～17行目）

冒頭に「一念三千は［十界互具］よりことはじまれり」と、［一念三千］は、［法華経］に説かれる［十界互具］が最大の要件であることを示される。そして、［法華経］に基づかない諸宗は、あるものは［十界互具］すら知らない。それにもかかわらず、諸宗が［成仏］を説くのは、［法華経］に基づいて［一念三千］を説いた［天台］大師の教えを［盗み取った］ものであると厳しく糾弾されている。

◆「仏教又かくの…人これをしらず」（189ページ18行目～190ページ7行目）

中国に種々の経典が雑然と伝わったために混乱が生じ、［南北朝］時代には「［南三北七］」と呼ばれる諸宗が生まれた。［天台］大師が登場して、諸経典を吟味して位置づけ、［法華経］こそが［最高の経典］であることを明らかにし、混乱を収拾した。

しかし、その後に伝わった［法相］宗・［華厳］宗・［真言］宗によって、仏法は再び混乱した。

◆「日本・我朝には…破れなんとす」（190ページ8行目～17行目）

日本では［奈良］時代までに［華厳］宗などの［南都六宗］が伝来したが、それらの有力諸宗では争いが続いていた。［平安］時代の初めに［伝教］大師が登場し、［法華経］が最も優れていること、また［真言］宗が［法華経の法理］を盗み取ったことを明らかにし、その争いを収拾した。ところが、［末法］が近くなっていて、人々の智慧が劣る時代になっていたので、［伝教］大師が確立した［法華経］第一の［天台］宗の正しい法義が伝えられなくなり、他宗の勢力が拡大していった。そのうえ、新興の［浄土］宗や［禅］宗などの教えよりも劣勢となり、最初は［信徒］、最後には［高僧］までが諸宗に移ってしまった。その結果、［諸天善神］も［正法の功徳］を得られず、国を去り、［悪鬼］・［魔神］が入り込み、国土が乱れた。

◆「此に予愚見をもつて…久遠実成なるべし」（190ページ18行目～191ページ1行目）

諸経と［法華経］の大きな違いとして、［法華経迹門］で説かれる［二乗作仏］と［本門］で説かれる［久遠実成］の二点が指摘される。

◆「法華経の現文を…疑網をなすべき」（191ページ1行目～9行目）

［法華経迹門］で［声聞］の弟子たちに［授記］がなされたことを挙げ、［二乗作仏］が明かされたことを述べられている。

◆「而れども爾前の諸経も…あしかりぬべしと・しりぬ」（191ページ10行目～193ページ15行目）

諸経典の文を挙げ、［二乗作仏］を説く［法華経］に対し、法華経［以前］の膨大な諸経では、［二乗］が［成仏］できず、また［供養］もすべきでないと厳しく糾弾されていたことを示されている。

◆「而るを後八年の…眼なるべし」（193ページ16行目～195ページ6行目）

［法華経］がそれ以前の諸教と正反対に［二乗作仏］を説いたことは「［自語相違］」と非難されても仕方がないことであるが、［法華経］の教えが正しいことは、［多宝如来］ならびに［十方の分身］の諸仏がこぞって正しいと［保証］したことを示されている。

◆「但在世は四十余年を…なげかせ給うらん」（195ページ7行目～196ページ1行目）

［法華経］だけに説かれる［二乗作仏］は、［諸仏］も［保証］した事実であるが、［釈尊滅後］の人々は多くの［経典］に惑わされ、［法華経］を信じられないことを示している。

◆「住劫・第九の減・人寿百歳の時・師子頬王には…那由佗劫なり」等云云」（196ページ2行目～197ページ9行目）

［久遠実成］が［爾前・迹門］では説かれず、［法華経本門］に至って初めて明かされたことを［経文］をたどりながら示されている。

ここでは、［釈尊］が［インド］に生まれ、［十九］歳で出家し、［三十］歳で成道したという［始成正覚］が［爾前経］の一貫した立場であることが述べられているとともに、［法華経の開経］である［無量義経］においてさえも、［始成正覚］を説いている点では変わらないことを示されている。

そして、［法華経迹門］の正宗分である［方便品］以後にいても、［迹門］では、まだ［始成正覚］の仏を説いていることを述べられている。

この［始成正覚］の立場を一言で打ち破ったのが、［寿量品］の「［A］」の一説である。

経文＝**然善男子。我実成仏已来、無量無辺百千億那由他劫**　（法華経478ページ・世界広布の翼を広げて　教学研鑽のために―開目抄39ページ）

〈然るに善男子よ。我は実に成仏してより已来、無量無辺百千億那由他劫なり〉

法梅連の 教学試験発心教材④ ＼ 開目抄 問答篇⑪ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「**華厳・乃至般若・・・・・・・二品には付くべき**」(197ページ10行目～198ページ8行目)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「権を開せずして迹門の一念三千をかくせり」(197ページ11行目)について、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

> **爾前経においては、十界がそれぞれ別々の境涯として説かれ、仏界と九界との間には超え難い断絶があるとされ、九界を厭離し断じることによって初めて仏界が得られるものであるとしている。このように十界の差別を固定化する方便の教えが説かれ、真実の教えが未だ明かされていないこと。**
> (開目抄講義上〈以下、『講義上』と称す〉82ページ・世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄〈以下、『開目抄』と称す〉47ページ)

問二 「爾前二種の失・一つを脱れたり」(197ページ13行目)について、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

> **法華経迹門の方便品第二で諸法実相・十如是を説いて、「九界の衆生に仏界が具わる」ことで、あらゆる衆生に成仏の可能性がある」ということを示すことで差別観を打ち破り、さらに二乗作仏も明かされたこと。**(『講義上82ページ・開目抄48ページ)

問三 「発迹顕本」(197ページ13行目)について、簡潔に説明しなさい。

> **垂迹**(仮の姿)**を発**(「開」の義)**して本地**(真実の姿)**を顕すこと。釈尊は法華経如来寿量品第十六で始成正覚の迹を開いて、久遠元初の本地が顕されることを示した。**(開目抄44ページ)

問四 「本因本果の法門なり」(197ページ16行目)について、述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。
さらに、［A］・［B］・［C］には法華経の経文があてはまります。その経文をも答えなさい。

寿量品の文上では、「［A］」と説かれ、［釈尊］の真実の成仏は計り知れない［久遠］の昔のことであったと明かされます。さらに、「［B］」とも説かれ、［久遠実成］の仏は［常住不滅］であることが明かされる。この［常住不滅］の［仏界］の生命が、［久遠］における［成仏の果］、すなわち［本果］です。

次に本因については、「［C］」と説かれます。［本果］である［仏界の生命］が［常住不滅］であるとともに、［本因］である［菩薩行］を行ずる生命も尽きることがないのです。このように、［九界の生命］を断じて、［仏界の生命］を成就するという爾前諸経の成仏観とは大きく異なるのが、［本門の因果］、［本因本果］です。

しかし、日蓮大聖人の仏法における［文底の本因本果］は、凡夫が初めて［妙法］を聞いて信受し、果てしない［菩薩道］の実践を決意するのが［本因］である。そして、その凡夫の生命に永遠の［仏界の生命］を涌現することをもって［本果］とするのです。

> A＝**我実成仏已来 無量無辺百千万億那由他劫**　(法華経478ページ・講義上85ページ)
> 〈我れは実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり〉

> B＝**我成仏已来 甚大久遠 寿命無量阿僧祇劫 常住不滅**　(法華経482ページ・講義上85ページ)
> 〈我れは成仏してより已来、甚だ大いに久遠なり。寿命は無量阿僧祇劫にして、常住にして滅せず〉

> C＝**我本行菩薩道 所成寿命 今猶未尽 復倍上数**　(法華経482ページ・講義上85ページ)
> 〈我れは本と菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命は、今猶お未だ尽きず、復た上の数に倍せり〉

問五 「九界も・・・一念三千なるべし」(197ページ16行目～17行目)について、日蓮仏法の文底に則して簡潔に説明しさい。

> **久遠実成の釈尊の常住の生命に、仏界も九界も常住している。これが「無始の仏界」であり「無始の九界」である。こうして、十界を具足しつつ常住する仏が明かされたのが法華経本門の文上である。その上で、あらゆる生命に十界が本有常住であり、九界の衆生も歴劫修行によって仏因を積まなくても、直ちに本有の仏界を開き顕すことで成仏できることを大聖人は示唆されている。**(開目抄51ページ)

問六 「法身」(198ページ7行目)「応身・報身」(198ページ9行目)について、具体的に説明しなさい。

> 法身＝**仏が覚った真実・真理。**(開目抄57ページ)

> 応身＝**人々を苦悩から救うために、現実に表した姿。**(同57ページ)

> 報身＝**最高の覚りの智慧をはじめ、仏と成った報いとして得た種々の優れた特性。**(同57ページ)

問七 「涌出・寿量の二品には付くべき」(198ページ8行目)について、具体的に説明しなさい。

> **法華経本門寿量品で久遠実成の仏が明かされてこそ、諸経の報身・応身の仏が、久遠実成の仏を本地とする垂迹となるのである。このような深い意義をもった久遠実成の本地を開顕されたのは、釈尊一代の教えのなかでも、僅か涌出品・寿量品の二品だけである。したがって、久遠実成に仏の本意があるとは信じ難くなること。**(同58ページ)

法梅蓮の 教学試験発心教材⑤ ／ 開目抄 問答篇㈣ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「されば法相宗と・・・・・答えをかまうべし」（189ページ-9行目～203ページ-14行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「されば法相宗と・・悪道に堕つべし」（189ページ-5行目～200ページ-1行目）の大意について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

法相宗は、衆生はその本性で五つに分けられ、それらは相いれない（五性格別）と説き、そのうち**仏性**のない「**無性**」と、**二乗**に成ることが決まっている「**決定性の二乗**」は**成仏**できないとする。次いで、**華厳宗**と**真言宗**は、**法華経**にしか説かれていない**二乗作仏**・**久遠実成**が、それぞれのよりどころである**華厳経**・**大日経**に説かれているとする。

また、有力な諸宗が**法華経**に反する邪義を主張しているが、それは**釈尊自身**が諸経で**予言**している通り、**滅後の悪世**、**末法**の様相であることを指摘されている。

問二 「大通結縁の第三類」（200ページ-5行目）について、大通結縁の衆生の三類をそれぞれ説明しなさい。

第一類＝**不退といい、発心して退転せず得道した者。**（世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄〈以下、『開目抄』と称す〉70ページ）

第二類＝**退大取小といい、発心はしたが、その後、大乗から退転して小乗教におち、声聞の境地にとどまった者。**（同70ページ）

第三類＝**未発心といい、聞いても全く発心しなかった者。**（同70ページ）

問三 「宝塔品の六難九易」（200ページ-14行目）について、本抄で引用されている三つの譬えを、それぞれ書きぬいて答えなさい。

我等程の小力の者・須弥山はなぐ〈須弥擲置易〉（御書200ページ・法華経390ページ・講義上135ページ・開目抄74ページ）

我等程の無通の者・乾草を負うて劫火には・やけず〈大火不焼易〉（御書200ページ・法華経391ページ・講義上135ページ・開目抄74ページ）

我等程の無智の者・恒沙の経経をば・よみをぼう〈余経説法易〉（御書200ページ・法華経390ページ・講義上135ページ・開目抄74ページ）

問四 「法華経は一句一偈も末代に持ちがたし」（200ページ-15行目）について、大聖人は本抄でどのように指摘されているかを答えなさい。

「末法には正法の者は爪上の土・謗法の者は十方の土」とみへぬ、（中略）世間の罪に依つて悪道に堕る者は爪上の土・仏法によつて悪道に堕る者は十方の土・俗よりも僧・女より尼多く悪道に堕つべし

（御書199ページ・開目抄講義上〈以下、『講義上』と称す〉120ページ）

問五 「強盛の菩提心を・をこして退転せじと願しぬ」（200ページ-16行目）について、菩薩が初めて発心した時に起こす「四弘誓願」を具体的に説明しなさい。

衆生無辺誓願度とは、一切衆生をすべて悟りの彼岸に渡すと誓うこと。（講義上95ページ）

煩悩無量誓願断とは、一切の煩悩を断つと誓うこと。（同）

法門無尽誓願知とは、仏の教えをすべて学び知ると誓うこと。（同）

仏道無常誓願成とは、仏道において無上の悟りを成就すると誓うこと。（同）

問六 「数数擯出見れん」（201ページ-5行目）にあてはまる法難を、起こった年（元号）月日・法難名をすべて順に答えなさい。

弘長元年5月12日～同3年2月22日、伊豆流罪

文永8年10月10日～同11年3月13日、佐渡流罪（講義上153ページ・開目抄104ページ）

問七 「障り未だ除かざる者を怨と・・嫉と名く」（201ページ-9行目）について、本抄ではどのような譬えで示されているかを答えなさい。

小児に灸治を加れば必ず母をあだむ重病の者に良薬をあたうれば定んで口に苦しとうれう（御書202ページ・講義上145ページ）

問八 「定んで天の御計いにも・・・あらざるか」（202ページ-9行目～10行目）について、大聖人は本抄でどのように仰せかを答えなさい。

当時の責はたうべくも・なけれども未来の悪道を脱すらんと・をもえば悦びなり（御書203ページ・開目抄105ページ）

問九 「法華経の第五の巻・勧持品の二十行の偈」（202ページ-11行目）について、本抄より選び、それぞれ答えなさい。

諸の無智の人あつて・悪口罵詈等し・刀杖瓦石を加う〈俗衆増上慢〉（御書202ページ・法華経418ページ・開目抄95ページ・103ページ）

悪世の中の比丘は・邪智にして心諂曲〈道門増上慢〉（御書202ページ・法華経418ページ・開目抄96ページ・103ページ）

白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如し〈僭聖増上慢〉（御書202ページ・法華経418ページ・開目抄96ページ・103ページ）

問十 「此の疑は此の書の肝心・一期の大事」（203ページ-11行目）について、具体的に答えなさい。

諸天の加護をめぐる疑問を解決し、門下に不動の信を確立させるとともに、それを通してご自身が真の法華経の行者であり、末法の御本仏であることを明かされたこと。（開目抄111ページ）

法梅蓮の 教学試験発心教材⑥ ／ 開目抄 問答篇㈤ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

問 「**季札といひし者は・・・・御弟子にあらずや**」（203ページ15行目～214ページ18行目）の御文の大意について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。また、［A］にあてはまる法華経の経文を、本抄の御文を参考にして答えなさい。

◆「**季札といひし者は・・・も亦報ずること能わじ』等云云**」（203ページ15行目～205ページ5行目）

［法華経］の［行者］である日蓮大聖人に［諸天善神］らの［守護］がないことについて、まず［守護］すべき者たちを順に挙げられ、法華経で初めて［成仏］が許された［二乗］こそ、［法華経］に大恩があり、［法華経］の［行者］を［守護］すべきであると示されている。

◆「**諸の声聞等は・・・いよいよ・つもり候**」（205ページ6行目～207ページ9行目）

まず諸経典での［二乗］に対する厳しい責めを詳細に挙げる。その［二乗］の［成仏］を説いた［法華経］に、［二乗］は深い恩があることが示される。その［二乗］が誓いどおりに［法華経］の［行者］を［守護］しないことは不思議であると、疑問を一段と強められている。

◆「**又諸大菩薩天人等の・・・とかせ給うも・これなり**」（207ページ10行目～208ページ10行目）

［二乗］に続いて、［菩薩］について検討する。まず［菩薩］たちは、［法華経］以前には［釈尊］から学ぶべきものがなく、むしろ［釈尊］の師あるいは［善知識］ともいえるべきものであったと指摘されたいる。

◆「**仏・御年・七十二の・・・いまだきかずと領解せり**」（208ページ11行目～210ページ4行目）

［法華経］の開経である［無量義経］では、「［四十余年未顕真実］」と述べて、それ以前に説かれた経々には［真実］が説かれていなかったことが明示された。

［法華経］では、［方便］品の「略［開三顕一］」で［成仏］の根本法である［一念三千］が簡略に示され、それによって、聴衆は「具足の道」を聞きたいと願った。この「具足の道」について、諸経や種々の注釈を引いて、それが「［南無妙法蓮華経］」であることを明かされている。

この仏のみが知る［成仏］の根本法が明かされて、はじめて［菩薩］たちも釈尊の［弟子］となったのである。

◆「**又今よりこそ諸大菩薩も・・・をどろきし意をかかれたり**」（210ページ5行目～211ページ4行目）

先に見たように、［法華経迹門］では前代未聞の［一念三千］の教えが説かれたが、それを聞いた［弟子］たちは、驚きのあまり直ちに信ずることができなかった。［宝塔］品に至って、［宝塔］が大地から出現して虚空に浮かび、［宝塔］の中にいた［多宝如来］がその疑いを晴らし、［釈尊］の［法華経］の教えが［真実］であることを保証する。さらに［虚空会］に集った無数の［十方分身］の諸仏も保証する。

この［十方分身］の諸仏はおびただしい数であるが、これだけの諸仏を分身として膨大な衆生を［教化］することは、釈尊が今世で［三十］歳で［成道］して以来のことでは到底いえない。それゆえ、［釈尊］の［成道］が遠い過去であることがあらあら示され、後の［涌出］品・［寿量］品で［久遠実成］を明かす遠い前触れとなっている。

◆「**其の上に地涌千界の・・・きかずと申すなり**」（211ページ5行目～212ページ7行目）

［見宝塔］品［第十一］で［十方］の［分身］の諸仏が集まることで、釈尊の仏としての長期間のふるまいが示唆されたが、［従地涌出］品［第十五］では、釈尊の呼びかけに応じて［滅後弘通］を担うべく、大地の下から無数の［地涌］の［菩薩］が出現する。これほど多くの［菩薩］が［釈尊］の［弟子］であるためには、［長期間］の［教化］が必要である。このような［疑問］が皆の心に生じ、［動執生疑］は起こる。

そこで［弥勒菩薩］が皆を代表して［釈尊］に尋ねるのである。

◆「**仏此の疑を答えて云く・・・寿量の一品の大切なるこれなり**」（212ページ8行目～213ページ12行目）

［弥勒菩薩］の疑問に対して、［釈尊］が、これらの無数の［菩薩］は［釈尊］が［成道］以来、［教化］してきた者たちであることを明かす。このことによって、［釈尊］が［久遠］の［過去］に［成道］したことがあらら示された。これが略［開近顕遠］である。それでもこの［真実］は、聴衆には到底信じられないものであった。

◆「**其の後・仏・寿量品を・・・なりと・やぶるもんなり**」（213ページ13行目～18行目）

［法華経］［如来寿量］品［第十六］で「［A］」と説いて、［始成正覚］をまさしく打ち破り、［釈尊］の［久遠］の［成道］である［広開近顕遠］を示される。この文の前半は、［釈尊］が今世で［成道］して以来、［法華経迹門］の最後の［安楽行］品［第十四］にいたるまで、大菩薩をはじめあらゆる人々が、釈尊は今世で初めて［成道］した［始成正覚］と理解していたことを挙げたものである。この文の後半では、そうではなく、［釈尊］は無量百千万億那由他劫という［久遠］の［過去］に実は［成仏］していたという［久遠実成］を明かしているのである。

◆「**此の過去常顕るる時・・・御弟子にあらずや**」（214ページ1行目～18行目）

［久遠実成］を明かされることによって釈尊と諸仏・菩薩との関係がどのように変わったかを述べられる。すなわち、［久遠］の［釈尊］に対して諸仏は［眷属］となる。したがって、その諸仏の［眷属］である迹化・他方などの［菩薩］も［久遠］の［釈尊］の末流の［弟子］ということになる。また、劫初から、この［娑婆世界］を守る［諸天善神］も、［久遠実成］の仏の［弟子］なのである。

こうして、［法華経本門］に至って、［久遠実成］の［釈尊］こそ一切衆生に対して［真］の［主師親］であることが明らかとなったのである。

経文＝**一切世間天・人、及阿修羅、皆謂今釈迦牟尼仏出釈氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場、得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我実成仏已来、無量無辺百千億那由他劫**〈一切世間の天・人、及び阿修羅は、皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり。然るに善男子よ。我は実に成仏してより已来、無量無辺百千億那由他劫なり〉

（法華経477ページ・世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄115ページ）

法梅蓮の 教学試験発心教材⑦ ／ 開目抄 問答篇㈥ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「而るを天台宗より・・・・・二箇のいさめ了んぬ」（215ページ1・3・4・6行目）・「法華経の種」（同ページ16行目）について、具体的に説明しなさい。
また、「本尊」について、「御義口伝」ではどのように仰せかを答えなさい。

釈尊の説いたとされる一切経の中では初めて法華経寿量品という形で、永遠の妙法が「成仏の種子」として顕現し、この万人の「成仏の種子」が寿量品の文底に秘沈されている故に、寿量品こそ一切経の頂点なのである。そして、一切経の中では寿量品の仏こそが成仏の修行の本尊とすべき仏であり、仏の本体である妙法蓮華経を指し示しており、この妙法蓮華経は、万人に内在する生命の法であり、万人の「成仏の種子」となるのである。（開目抄講義上〈以下、『講義上』と称す〉172ページ）

御義口伝＝本尊とは法華経の行者の一身の当体なり（御書760ページ・講義上175ページ）

問二 「今者已満足の文これなり」（217ページ1行目）について、具体的に説明しなさい。

釈尊をはじめ諸仏が菩薩の時に、すべての衆生を苦しみから救おうという誓願を立てたが、それは、法華経を説くことによって成就できたこと。（世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄〈以下、『開目抄』と称す〉127ページ）

問三 「疑て云く当世の・・下にかくべし」（217ページ10行目～218ページ9行目）で述べられている「三箇の勅宣」を具体的に説明しなさい。

三つの仏の命令として「付嘱有在」「令法久住」「六難九易」の文が、宝塔品に順にあげられており、「付嘱有在」とは、釈尊滅後の弘通を弟子に託そうとすることである。天台大師は『法華文句』で、二つの意義があるとした。一に釈尊滅後の近い世においては迹化の菩薩に付嘱して娑婆世界に弘めさせる。二に釈尊滅後の遠い世である末法における流布のためには地涌の菩薩に付嘱して、いたるところの国土に流布させる。特に、後者は寿量品を説き起こす準備であると解釈している。また、「令法久住」とは、未来永遠にわたって妙法が伝えられていくようにする、さらに、「六難九易」とは、滅後における法華経の受持・弘通の難しさを六つ挙げ、それが一般的に難事と思われる九つのことよりも難しいとし、それでもその難事を成し遂げ滅後に法華経を弘通することを促すものである。（法華経385ページ～393ページ・開目抄129ページ）

問四 「第三の諫勅なり」（218ページ8行目）ついて、「六難九易」にあてはまる御文を本抄より書きぬきなさい。

諸余の経典数・恒沙の如し此等を説くと雖も未だ為れ難しとするに足らず〈余経説法易〉
若し須弥を接つて他方無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず〈須弥擲置易〉
若し仏滅後・悪世の中に於て能く此の経を説かん是則ち為れ難し〈広説此経難〉
仮使劫焼に乾れたる草を担い負うて中に入つて焼けざらんも亦未だ為れ難しとせず〈大火不焼易〉
我が滅度の後に若し此の経を持ちて一人の為にも説かん是則ち為れ難し〈少説此経難〉
（御書218ページ・法華経390ページ～393ページ・講義上135ページ）

問五 「已今当」（219ページ17行目）について、具体的に説明しなさい。

仏が「已に説き、今説き、当に説く」と述べた過去・現在・未来の一切経の中で、法華経は釈尊の深遠な真意を説いたものであるゆえんに最も難信難解の教えであるということが法師品に説かれている。（法華経362ページ・開目抄135ページ）

問六 「教の浅深をしらざれば理の浅深を弁うものなし」（222ページ8行目）について、具体的に説明しなさい。

「六難九易」や「已今当」のように、仏自らが判定した教の浅深がわかなければ、教に含まれている法理の浅深には迷うのは当然である。（講義上190ページ・開目抄136ページ）

問七 「六難九易」（223ページ4行目）の意義について、述べられている伝教大師の文を、御書より選び答えなさい。

浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり
（「報恩抄」御書310ページ・講義上187ページ）

問八 「二箇の諫暁あり」（223ページ5行目）について、その意義を答えなさい。

爾前経では明かされていなかった「女人成仏」と「悪人成仏」が、明確に説き明かされたことは、法華経こそが、悪世末法に生きる万人の成仏を実現する唯一の大法である。さらに、竜女の成仏ですべての女性の成仏が可能になり、また提婆の悪人成仏によってすべての男性の成仏が可能になったのである。まさに、変毒為薬・即身成仏の妙法こそが、末法の全人類を救済する大法であり、あらゆる父母を救う信の孝養の大道となるのである。（開目抄147ページ）

法梅蓮の 教学試験発心教材⑧ ／ 開目抄 問答篇㈦ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「已上五箇の鳳詔に・・・・・三類の怨敵にあらずや」(223ページ-15行目～229ページ-9行目)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「五箇の鳳詔」(223ページ-15行目)について、説明しなさい。

宝塔品における三箇の勅宣と提婆達多品における二箇の諫暁をさし、三箇の勅宣とは「付嘱有在」「令法久住」「六難九易」、二箇の諫暁とは「女人成仏」「悪人成仏」をそれぞれ説いている。

（世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄〈以下、『開目抄』と称す〉156ページ）

問二 「頚はねられぬ」と「魂魄」(223ページ-16行目)を用いて、大聖人の「発迹顕本」を説明しなさい。

凡夫として振る舞われたお立場は竜の口で終えられたことを「頚はねられぬ」と表現され、「魂魄」とは、万人成仏の妙法を広宣流布する久遠元初の自受用身、末法の御本仏としての生が始まることが、大聖人の発迹顕本と拝することができる。

（開目抄講義下〈以下、『講義下』と称す〉14ページ・開目抄158ページ）

問三 「唯願くは・・・数数擯出せられん」(224ページ-1～8行目)を、「三類の強敵」に配しなさい。

第一類＝諸の無智の人の悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし〈俗衆増上慢〉

（法華経418ページ・開目抄160ページ）

第二類＝悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充満せん〈道門増上慢〉

（法華経418ページ・開目抄160ページ）

第三類＝或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら真の道を行ずと謂つて人間を軽賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん、是の人悪心を懐き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん〈僭聖増上慢〉

（法華経418ページ・開目抄160ページ）

問四 「初に一行は・・・以ての故に」(224ページ-9行目～11行目)について、具体的に説明しなさい。

最初の俗衆(増上慢)は、仏法に「無知」な在家の人々で、悪口罵詈、刀杖など、言葉や暴力の迫害を加えます。次の道門増上慢は、「邪知」にして心の諂い曲がった悪世中の比丘たちは、まだ、悟りを得ていないのに得たと思いこみ、自義に執着する慢心が充満しています。第三の僭聖増上慢は、文字通り〝聖者を装い〟ながら、人々を軽賤し、利欲を貪り、阿羅漢のように崇められ、法華経の行者を貶め、権力者などに讒言するなどの迫害をする。（講義下17ページ・開目抄161ページ）

問五 「夫れ鷲峯・雙林の・・・三聖の怨敵にあらずや」(225ページ-8行目～227ページ-15行目)の大意について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

まず［三類の強敵］を明かした経文に、日蓮大聖人の御在世当時の諸宗の［僧］の様相が全く一致していることを指摘され、［末法］が［悪世］であるとする他の経文を再度確認される。［末法悪世］の今日に［三類の強敵］がいることが明白なら、彼らが［迫害］する相手である［法華経の行者］がいることも確実であると示される。そのうえで、外典でも［予言］が当たる例や付法蔵経の［予言］が［的中］した例を挙げて、［法華経の予言］もまた現実のものとなることを明確にされる。

次に、［三類の強敵］のうち、第［一］の「［俗衆増上慢］」と第［二］の「［道門増上慢］」について明らかにされている。

さらに、［釈迦］、［多宝］、［十方の諸仏］が［法華経］こそ［真実］［永遠の成仏の法］であることを保証し［令法久住］を図ったのに対して、［法然］ら［念仏者］が「［法華経］は［末法］では［念仏］よりも前に［功力］を失ってしまう」という邪説を広めたのは、これらの［仏］に対する［怨敵］であると［破折］されている。

問六 「第三は、法華経に・・・怨敵にあらずや」(227ページ-16行～229ページ-9行目)について、僭聖増上慢の悪の本質を明かされている御文を、本抄より書きぬきなさい。

「羅漢に似たる」、「持律に似像して少かに経典を読誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん」、
「外には賢善を現し内には貪嫉を懐く」、「実には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」、
「出家の処に一切の悪人を摂す」、「一種の禅師は唯観心の一意のみ有り或は浅く或は偽る余の九は全く此無し」、
「文字法師とは内に観解無くして唯法相を構う事相の禅師とは境智を閑わず鼻膈に心を止む」、
「臨終に皆悔ゆ」、「究竟の処を見ずとは彼の一闡提の輩の究竟の悪業を見ざるなり」（講義下36ページ）

法梅蓮の 教学試験発心教材⑨ ／ 開目抄 問答篇(八) 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「当世の念仏者等……願やぶるべからず」（229ページ-10行目～232ページ-6行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一「当世の念仏者等…行者というべきか」（229ページ-10行目～18行目）の大意について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

当時の日本に［法華経の行者］がいないことを述べられている。

まず、本来は［法華経］を［擁護］すべき［天台宗］の僧たちまで、［念仏］・［禅］に屈服するにいたっている現実を指摘されている。また、世間的な悪事で流罪されたり非難されたりしている［僧侶］も、［法華経］のために［迫害］を受けたのではないから、［法華経の行者］ではないことが示される。これに対して大聖人の場合は世間の罪によって難に遭われたのでは全くなく、そのことごとくが［法華経の経文］通りに［正法］を［弘通］されたことによるものであり、したがって、［大聖人］こそ［法華経の行者］であるといえることが示されている。

問二「仏と提婆とは身と影とのごとし生生にはなれず」（230ページ-5行目）について、具体的に説明しなさい。

正法を弘める仏に対し、それを妨げる魔は、身と影のように、生まれるたびに離れず一緒に存在するのである。すなわち、「身」が行動している限り、「影」はつきまとうように、法華経の行者の実践を契機にそれを妨げようと元品の無明が発動した働きが、三類の強敵なのである。

（開目抄講義下〈以下、『講義下』と称す〉47ページ・世界広布の翼を広げて　教学研鑽のために―開目抄　〈以下、『開目抄』と称す〉184ページ）

問三「天の諸の…白癩の病を得ん」（230ページ-9行目～12行目）について、引用されている経文を、「行者守護」（法華経の行者は諸天善神の加護を受け、現世安穏となる）と「謗者現罰」（法華経の行者に対して誹謗・迫害を加える者は現罰を受ける）にそれぞれ配しなさい。

行者守護＝「天の諸の童子以て給使を為さん、刀杖も加えず、毒も害すること能わざらん」、
「現世には安穏にして後、善処に生れん」、
「現世に於て其の福報を得ん」（講義下60ページ・開目抄199ページ）

謗者現罰＝「若し人悪罵すれば口則閉塞す」、「頭破れて七分と作ること阿梨樹の枝の如くならん」、
「若し復是の経典を受持する者を見て其の過悪を出せば若しは実にもあれ若しは不実にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん」（同）

問四「不軽品に云く…かんがへたるがごとし」（230ページ-13行目～231ページ-18行目）について、法華経の行者が大難を被っても諸天善神の加護がないことや迫害者に現罰が現れない理由を、大聖人はどのように仰せになっているかを三点答えなさい。

不軽菩薩自身が過去の法華誹謗の宿業があったために、不軽菩薩を迫害した人々に現罰がなかったことが、不軽品に説かれている。このように、法華経の行者自身が謗法の宿業をもっている場合は、迫害者に直ちには現罰が出ない。

（講義下62ページ・開目抄202ページ）

仏の教えを信じようとする心がなく、正法とそれを説く者を誹謗したり、さまざまな重罪を悔い改めようとしない一闡提者の場合は、死後、無間地獄に堕ちることが確定しているので、現罰が出ない。一闡提でない場合は、現罰を受けて菩提心を起こして成仏ができる。（講義下65ページ・開目抄203ページ）

一国が謗法と化した時は、諸天善神がこの国を捨て去ってしまって、そのため法華経の行者への加護がなく、誹謗者への治罰もないので、現罰がない。このように悪国・悪時に諸天が国を捨て去るということは、「立正安国論」のなかで詳しく説かれている。（講義下67ページ・開目抄204ページ）

問五「詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん」（232ページ-1行目）について、大聖人の御心境を推察しなさい。

いかに末法の法華経の行者は大難を受けると法華経に予言されていても、また、どれほど大聖人が諸天の加護が現れない理由を理を尽くして示されても、大聖人があえて「謗法」という根源悪と戦われて苦難を受けなければならない理由がわからない。そこで大聖人は、御自身の「誓願」という形で、謗法と戦う法華経の行者としての御境地を示されているのである。

（講義下81ページ・開目抄209ページ）

問六「身子が…塵なるべし」（232ページ-1行目～5行目）について、具体的に説明しなさい。

誓願の人生を歩むうえで最も大切なことは「不退の心」である。それは身・口・身にわたる不退でなければならず、生涯、戦い続ける魂を失わないことである。誓願は、貫き果たしてこそ、真の誓願なのである。（講義下84ページ・開目抄210ページ）

問七「我日本の…大船とならむ」（232ページ-5行目）について、主師親の三徳にそれぞれ配しなさい。

主徳＝日本の柱とならむ（講義下90ページ・開目抄212ページ）

師徳＝日本の眼目とならむ（同）

親徳＝日本の大船とならむ（同）

法梅蓮の 教学試験発心教材⑩ ／ 開目抄 問答篇㈨ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「疑うて云くいかにとして・・・・・大楽を・うくべければ大に悦ばし」（232ページ-7行目～237ページ-終）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「善男子過去に・・・或は王難に遭い」（232ページ-8行目～10行目）について、具体的に説明しなさい。

過去世の宿業の報いとして今世に受ける苦難には、「軽んじられる」「姿・形が醜い」「衣服が不足する」「飲食が粗末である」「財を求めても得られない」「貧しくて身分の低い家に生まれる」「邪見の家に生まれる」「王から迫害を受ける」の八種類の苦難がある。

（開目抄講義下〈以下、『講義下』と称す〉107ページ・世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために―開目抄〈以下、『開目抄』と称す〉219ページ）

問二 「余の種種の・・・由るが故なり」（232ページ-10行目～11行目）について、「転重軽受法門」ではどのように仰せかを答えなさい。

涅槃経に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱつときへて死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候（御書1000ページ・講義下112ページ）

問三 「今ま日蓮・強盛に・・・招き出だせるなるべし」（233ページ-3行目～4行目）について、具体的に説明しさい。

護法の実践で鍛え上げられた生命は、謗法の悪業という不純物をたたき出し三世永遠に不滅となる無始以来の生死の繰り返しのなか、この一生で宿命転換が実現し、永遠に崩れない仏界の境涯を胸中に確立することができる。

（講義下117ページ・開目抄228ページ）

問四 「譬えば貧女の・・・自ら至るが如し」（233ページ-6行目～12行目）について、具体的に説明しなさい。

貧女がわが身を顧みず、あらゆる苦難に遭いながら、子どもをどこまでも手放さなかった慈悲の心を通して、正法護持の精神を譬えで教えたものである。すなわち、自ら覚りを得た仏がその覚りをそのまま説いたのが法華経であるから、法華経そのものが了因であり、凡夫にあってはこの法華経への信心の心が了因仏性なのである。この法華経の信心を離さないことを示されたのである。（講義下189ページ・講義112ページ）

問五 「我並びに我が弟子・・・わするるなるべし」（234ページ-7行目～9行目）について、この御文に呼応する御文を本抄より選び答えなさい。

詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん（中略）我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず（御書232ページ）

問六 「妻子を不便と・・・返てみちびけかし」（234ページ-9行目～11行目）について、具体的に説明しさい。

どのような人も無始以来の無数の生死流転において、その都度、妻子との別れはあったのであるが、その別れの相を直視して、いつかは別れざるをえないのであれば、まず自らが信心を貫き通して成仏の境涯を得て、そのうえで妻子を霊山に導くべきであると示されている。（開目抄247ページ）

問七 「夫れ仏に両説あ・・・国かと・しるべし」（234ページ-14行目～235ページ-13行目）について、「摂受」・「折伏」をそれぞれ具体的に説明しなさい。

摂受＝無智・悪人が国土に充満している時は、安楽行品に説かれている通り、弘通において相手の見解を容認しつつ、寛容の姿勢で次第に正法へと誘引していく化導法である摂受（摂引容受）を優先させる。摂受には慈悲を自ら実践していく面がある。（講義下155ページ・開目抄253ページ）

折伏＝邪智・謗法の者が多いときは、常不軽品に説かれている通り、相手の悪心を折って正法に伏せしめていく厳愛の行為である折伏（破折屈服）を優先させる。自らの内なる悪、己心の魔と戦い、打ち破っていく面があり、末法の時代は折伏が時に適った実践となるのである。（同）

問八 「若し善比丘法を・・・仏法中の怨なり」（236ページ-11行目～15行目）について、具体的に説明しさい。

仏法を破壊する者に対して何もせずに放置しているのは、自身も「仏法中の怨」になってしまう。それとは反対に仏法破壊の者に呵責を加える折伏を行じた者は、真の仏弟子といえるのである。真の仏弟子であるということは、成仏は間違いないということである。（講義下161ページ・開目抄270ページ）

問九 「夫れ法華経の宝塔品を・・・是れ彼が親[等云云]」（236ページ-16行目～237ページ-6行目）について、具体的に答えなさい。

宝塔品において釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏の三仏が集った目的の元意は、法華経を未来の一切の仏子に与えることであり、悪世末法の大苦の衆生を憂えられた三仏がこの妙法を残された。この妙法を弘めんがために自らの身命も惜しまず折伏を行じられているのは、一切衆生を救済しようとの大聖人の慈悲の発露であり、そこに一切衆生の主師親であられるゆえんがある。（講義下175ページ・開目抄279ページ）

法梅蓮の

教学試験発心教材⑪ ／ 生死一大事血脈抄 ㈠ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

本抄『生死一大事血脈抄』について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一　本抄がご執筆された背景や対告衆・題号について述べられている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

本抄「生死一大事血脈抄」は、文永九年二月十一日、五十一歳の時、流罪地・佐渡の塚原で認められ、最蓮坊に与えられたとされている。

同年一月十六・十七日、佐渡だけでなく、各地から多くの念仏などの諸宗の法師・僧侶が集まって、大聖人を処分せよとの声に佐渡の守護代・本間重連は、塚原において法論によっての決着を申し渡す。その結果、悉く大聖人に完膚なきまでに破折されるのであった。

〈「種種御振舞御書」（917ページ12行目～）参照〉

この塚原問答に示されるように、念仏者たちの憎悪は強く、そのため幕府の要人から敵視された大聖人は、絶えず命の危機にさらされる日々であった。一方で、阿仏房、国府入道らが大聖人の偉大な御境涯に触れ、帰依している。

対告衆とされる最蓮坊は、本抄の他に「諸法実相抄」「当体義抄」「祈祷抄」などの重書をいただいたとされる。

最蓮坊については、京都出身の天台の元学僧であったとされるが、佐渡への流罪などの詳細は不明である。

本抄の題号にある「生死一大事」とは、生と死を繰り返して流転する生命において根本の大事、万人成仏の法を意味する。

また、「血脈」とは、法が仏から衆生へと伝えられていくことを、親から子へ血筋が受け継がれることに譬えられた表現である。

したがって、「生死一大事血脈」とは、仏から衆生に伝える根本的に重要な成仏の法を意味する。

問二　本抄の大意ついて述べられてる次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

本抄では、初めに、生死一大事血脈の法とは妙法蓮華経であり、それは法華経で釈迦・多宝の二仏から上行菩薩に悪世での妙法弘通を託された極めて重要な法であり、また、妙法蓮華経の五字は無限の過去から常に生命に具わっている血脈であるとされている。

そして、あらゆる生命の生死、また、あらゆる事物の生成・消滅は、全て「妙法蓮華経の生死」であり、妙法蓮華経の起滅であるとされ、妙法蓮華経が万物の生死と因果を貫く宇宙根源の法であることを明かされている。これにより、十界の全ての衆生の生死は妙法蓮華経の生死であることになる。また、釈迦・多宝の二仏も生死の二法を表しているとされる。

次に、衆生が生死一大事の血脈を受けるためには、どのような信心の姿勢に立つべきかを、以下の点において教えられている。

第一に、究極の仏と究極の法と、私たち衆生の生命の三つがともに妙法蓮華経であり、全く差別がないと信じて南無妙法蓮華経と唱える信行に生死一大事血脈がある。

第二に、ひと度、法華経を信受し下種結縁すれば、過去世・現在世・未来世の三世にわたって、それが生死を超えて途切れることなく続き、成仏へと導かれるのである。ただし、それを断ちきるのが謗法・不信である。どこまでも現在の生涯不退転の信心によって、血脈は途切れず、成仏が実現できるのである。

第三に、仏の根本の願いである広宣流布を目指して、異体同心で南無妙法蓮華経と唱えるところにのみ血脈が通うのである。

次に、大聖人と最蓮坊の師弟に深い宿縁があることが述べられるとともに、最蓮坊が仏法の極理を質問されたことに対し、前代未聞のことであると喜ばれて、大聖人が上行菩薩の役割を担っていることを示唆されている。

最後に、生死一大事血脈の血脈とは「信心の血脈」であると結論され、一層強情な信心を起こすよう激励されて本抄を結ばれている。

問三　「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」（1336ページ1行目～2行目）について、具体的に説明しなさい。

妙法蓮華経こそ、宝塔の中に並び座る法華経の虚空会の儀式において、法華経の真理の普遍性を証明する「多宝仏」が存在していることで、娑婆世界の仏である久遠実成の「釈迦仏」から、久遠以来の釈尊の弟子として鍛え抜かれている地涌の菩薩の上首である「上行菩薩」へと付嘱された、仏教の「正統中の正統の法」であることが示されている。（講義32ページ）

問四　「妙法蓮華経の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈」（1336ページ2行目）について、具体的に説明しなさい。

永遠の妙法である妙法蓮華経が上行菩薩の身に本来に具わっているため、無明を打ち破り妙理を顕す「心の力」、妙法を弘める「実践の力」に優れているからこそ、生命の法である妙法蓮華経を全ての衆生に伝えていく「血脈」が成り立つ。（講義36ページ）

問五　「妙は死法は生なり」（1336ページ2行目～3行目）について、具体的に説明しなさい。

「法」は現れた現象を意味することから、ここの生命として現れる「生」に当たり、生命が死んで融合していく宇宙は、思議し難いことから、不思議を意味する「妙」を「死」に配される。（講義52ページ）

問六　「当体蓮華」（1336ページ3行目）について、具体的に説明しさい。

全ての衆生の身が十界互具の当体であり、その身において仏界を現しうることから、妙法の当体であるということ。「蓮華」は、今の一瞬の生命に、成仏の因である九界も、果である仏界も、同時に具わっている（因果具時）こと。（講義66ページ）

法梅蓮の 教学試験発心教材⑫ ／ 生死一大事血脈抄 (一) 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「然れば久遠実成の・・・・・城者として城を破るが如し」(1337ページ2行目～14行目)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「久遠実成の釈尊」「皆成仏道の法華経」(1337ページ2行目)について、それぞれ具体的に説明しなさい。

釈　尊＝寿量品において、久遠五百塵点劫という過去遠遠劫に成仏して以来、この娑婆世界で衆生を救い続けている常住の仏であるのが、釈尊の本地であると説かれている。すなわち、この娑婆世界にあって、衆生教化に戦い続けるために、「仏界の生死」を現していくのである。(講義86ページ・大白78ページ)

法華経＝法華経では、皆が平等に仏道修行によって成仏できることを明かしている。さらに、法華経には民衆救済に生き抜くという仏の本来の誓願が説かれており、仏とともに民衆救済の慈悲の実践を貫く菩薩の誓願も説かれている。(講義87ページ・大白79ページ)

問二 「三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る」(1337ページ3行目)について、具体的に説明しなさい。

真実の仏と真実の教えと私たち衆生が、本性としては妙法蓮華経の当体として違いがないことを、凡夫の身の上に実証されたのが日蓮大聖人であられる。そして、その究極の妙法が南無妙法蓮華経であると説き示し、唱題行という「解り」(信解＝信に基づく理解)をもって、御本尊として顕されたのである。御本尊に誓願の唱題をすること。(講義90ページ・大白79ページ)

問三 「臨終只今」(1337ページ4行目)について、具体的に説明しなさい。

臨終という人生の総決算の意味を強く感じ、一日一日、一瞬一瞬に生命を燃焼させていく。「今、臨終になっても悔いがない」と言い切れる覚悟で、「現在」を真剣に生きる。また、「臨終正念」とは、この「臨終只今」の信心を積み重ねていくことで、生命を鍛え、磨き抜き、境涯を高めてき、今世の生き方に確信と納得を持ち、臨終に際しても、悔いなく、妙法を唱えきって、安詳に霊山へ旅立っていける、荘厳なる境涯である。(講義101ページ)

問四 「過去の生死・・・法華経を離れ切れざる」(1337ページ10行目)について、具体的に説明しなさい。また、『総勘文抄』ではどのように仰せかを答えなさい。

法華経受持によって、今世の生死が変革されると、これまでの迷いの生死、苦しみの生死は、実は夢のようなものであり、仏が如実知見したありのままの「妙法蓮華経の生死」すなわち「仏界の生死」こそが、夢から覚めた現実の生死である。(講義118ページ・大白81ページ)

総勘文抄＝九界の生死の夢見る我が心も仏界常住の寤の心も異ならず九界生死の夢見る所が仏界常住の寤の所にて変らず心法も替らず在所も差わざれども夢は皆虚事なり寤は皆実事なり〈通解＝講義128ページ参照〉(御書565ページ・講義119ページ)

問五 「仏に成るべき種子を断絶する」(1337ページ11行目)について、『新池御書』ではどのように仰せかを答えなさい。

始より終りまで弥信心をいたすべし・さなくして後悔やあらんずらん、譬えば鎌倉より京へは十二日の道なり、それを十一日余り歩をはこびて今一日に成りて歩をさしをきては何として都の月をば詠め候べき(御書1440ページ・講義122ページ)

問六 「自他彼此の心」(1337ページ12行目)について、具体的に説明しさい。

「自分」と「他人」、「彼(かれ)」と「此(これ)」を切り離して心を通わせない、「対立」「差別」「自己中心」の心です。すなわち、自分と他人の間に隔たりを設け、差別し、自分の利害だけを考えて他者のことを顧みない心。この心に囚われて信心を失えば、広宣流布の大願を同心とする清浄無比の和合僧を破壊することになる。(講義133ページ・大白83ページ)

問七 「水魚の思を成して」(1337ページ12行目)について、具体的に説明しさい。

切り離すことができない水と魚の関係のように「親密な思」をいい、互いに異なる立場にあっても、尊敬しあい、理解しあい、守りあい、感謝しあっていくことである。中国の『三国志』では、劉備玄徳と諸葛孔明の緊密な関係を「水魚の交わり」と称えられている。(講義134ページ・大白83ページ)

問八 「異体同心」(1337ページ12行目)について、『異体同心事』ではどのように仰せかを答えなさい。

異体同心なれば万事を成し同体異心なれば諸事叶う事なしと申す事は外典三千余巻に定りて候、殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なればかちぬ、一人の心なれども二つの心あれば其の心たがいて成ずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず(御書1463ページ・講義144ページ)

法梅蓮の

教学試験発心教材⑬ ／ 生死一大事血脈抄 (三) 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

「日本国の一切衆生に・・・・・委細の旨又又申す可く候、恐恐謹言」(1337ページ-14行目～1338ページ-終)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんと」(1337ページ-14行目～15行目)について、具体的に説明しなさい。また、この御文に関連する法華経の経文を答えなさい。

法華経は、〝すべての人を成仏させよう〟との「仏の大願」が貫かれている経典です。そして、その誓願を受け継いだ人こそが「真の菩薩」であり、「仏の真の弟子」であることが明かされている。さらにまた、釈尊滅後の一閻浮提広宣流布が遺命され、広宣流布を断絶させる魔性との闘争に勝ち抜かなければならないことが示されている。(講義150ページ・大白87ページ)

経文＝我滅度後、後五百歳中、広宣流布於閻浮提、無令断絶、悪魔・魔民・諸天 竜・夜叉・鳩槃茶等・得其便也

〈我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸天 竜・夜叉・鳩槃茶等に其の便を得しむること無かれ〉(法華経601ページ・講義167ページ)

問二 「火も焼くこと能わず水も漂わすこと能わず」(1337ページ-18行目)について、具体的に説明しなさい。

妙法を受持した人の福徳の偉大さを説いたもので、妙法を受持した人は、我が胸中に仏界という偉大な力を涌現していくゆえに、いかなる苦悩や困難にも侵されることなく、厳然と勝ち抜くことができるのである。(講義157ページ・大白89ページ)

問三 「在在諸仏土 常与師俱生」(1338ページ-1行目)について、具体的に説明しなさい。

「自他ともの成仏」「自他ともの幸福」という人間の、また生命の〝最も深い願い〟を実現するために戦う師弟関係が永遠であることを示している。この〝最も深い願い〟を思い起こさせてくださるのが真の師であり、その師の教えに従って、〝その通りである〟と心から納得して、師の仰せの通りに行動を起こしていくのが真の弟子といえる。(講義159ページ・大白89ページ)

問四 前問の経文について、戸田第2代会長はどのように仰せかを答えなさい。

どこであろうと、もろもろの仏土に、お師匠様とかならずいっしょに生まれるとあるが、それはウソではない。師匠と弟子というものはかならずいっしょに生まれるという。この大聖人様のお言葉から拝すれば、じつにみなさんに対して、私はありがたいと思う。約束があって、お互いに生まれてきたのです。(講義161ページ)

問五 「火は焼照を以て行と為し・・・天は潤すを以て行と為す」(1338ページ-4行目～6行目)について、具体的に説明しなさい。

火＝物を焼き、光明となって万物を照らす。(講義175ページ・大白93ページ)

水＝垢や穢れを浄化する働きを持つ。(講義175ページ・大白93ページ)

風＝塵や埃を払い、古来、風が万物に生気を吹き込むと考えられていた。(講義175ページ・大白93ページ)

地＝大地には、草木が生い茂り、生命を育む働きがある。(講義176ページ・大白93ページ)

空＝天は雨を降らし、万物を潤す働きがある。「天」は「空」と配することができる。(講義176ページ・大白94ページ)

問六 前問の『地水火風空』の五大力用のうち、『地水火風』の四大力用について、日寛上人が指南されている次の文中の［　　］にあてはまる語句を答えなさい。

「火はこれ空に上る、故に［上行］は火大なり。風は辺際無し、故に［無辺行］は風大なり。水はこれ［洗浄］なり、故に［浄行］は水大なり。地はこれ万物を［安立］す、故に［安立行］は地大なり」(講義184ページ)

問七 「生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ」(1338ページ-9行目)について、具体的に説明しなさい。

一人ひとりが唱題を根本に、現実に境涯を変革して、一生成仏を実現するには、日蓮大聖人が弘められた本因妙の仏法以外に、生死一大事血脈は存在しないのである。(講義207ページ・大白99ページ)

問八 「煩悩即菩提・生死即涅槃」(1338ページ-9行目)について、具体的に説明しなさい。

「煩悩即菩提」とは、煩悩に支配されている衆生の生命に、成仏のための悟りの智慧(菩提)が現れることであり、「生死即涅槃」とは、生死の苦しみに苛まれている衆生の身に、仏が成就した真の安楽(涅槃)の境地が顕現することである。優れた医師が毒をも薬として用いるように、凡夫の煩悩・業・苦の三道は、妙法の力で法身・般若・解脱の三徳へと転換できるという法理。この法理を心から信じたときに、私たちは苦悩のもととしての生死を超えることができ、そのときの法華経の聞法(聴聞)が真に成り立つのである。(講義209ページ・大白97ページ)

法梅蓮の

教学試験発心教材⑭ ／ 日顕宗を破す㈠ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

日顕宗について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一　仏法を実践していく上で、一番大事なことである人々の心を惑わす悪縁の「一凶」と戦い抜くことを教えられている御文を二つ答えなさい。

如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには（『立正安国論』24ページ・大白101ページ）

唯須く凶を捨てて善に帰し源を塞ぎ根を截べし（同25ページ・大白 同ページ）

問二　現在の日蓮正宗を「日顕宗」と呼ぶ理由を答えなさい。

前法主の日顕が支配し、日蓮大聖人の仏法の教義と御精神に真っ向から違背した謗法の教団となったからであり、法主が日如に代わっても、日蓮正宗の謗法の濁流は変わらないため、「日顕宗」と呼び続けている。（大白 同ページ）

問三　日蓮大聖人が、「法華経の敵」を徹して責め抜けと仰せの御文を二つ答えなさい。

信心ふかきものも法華経のかたきをばせめず、いかなる大善をつくり法華経を千万部読み書写し一念三千の観道を得たる人なりとも法華経の敵をだにも・せめざれば得道ありがたし（『南条兵衛七郎殿御書』1494ページ・大白 同ページ）

法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と倶に地獄に堕ちん」云云、謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし（『曾谷殿御返事』1056ページ・大白102ページ）

問四　仏法上の大罪である「五逆罪」をすべて答えなさい。

父を殺す・母を殺す・阿羅漢を殺す・仏身より血を出す・和合僧を破る（破和合僧）（大白 同ページ）

問五　末法での弘教を誓った「四菩薩」について、『観心本尊抄』ではどのように仰せかを答えなさい。

此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成つて愚王を誡責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す（御書254ページ・大白103ページ）

問六　日蓮大聖人が、仏法西還と世界広宣流布を予言された御文をそれぞれ答えなさい。

仏法西還＝月は西より出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し正像には西より東に向い末法には東より西に往く（『顕仏未来記』508ページ・大白105ページ）

世界広布＝大集経の白法隠没の時に次いで法華経の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべからざるか（『撰時抄』265ページ・大白 同ページ）

問七　「第一次宗門事件」について答えなさい。

昭和52年（1977年）前後から54年にかけて、日蓮正宗の末寺等で宗門の僧による理不尽な学会批判が繰り返される。反逆者が宗門（日蓮正宗宗門）の僧と結託し、池田会長（当時）と学会員の分断する謀略があった。そして、池田会長は、学会員を守り、僧俗和合を図るために、昭和54年4月、ついに会長職を辞し、名誉会長となっり、事態の収拾に努めた。（大白106ページ）

問八　「第二次宗門事件」について答えなさい。

平成2年（1990年）、当時の法主・日顕は「C作戦（創価学会分離作戦）」を企て、学会の切り捨てを図った。同年12月、宗門の宗規を一方的に変更し、池田名誉会長の法華講総講頭をはじめとする学会幹部の大講頭の罷免を通告することで、学会員信徒を宗門に隷属させようとした。この宗門の暴挙に対し、学会側は御書に基づいて明確に反論し、話し合いによる解決を求めたが、宗門側は一切を拒否し、学会員に対しての御本尊の授与を停止し、ついに翌3年2月、一方的に学会を破門するというさらなる暴挙に出た。（大白 同ページ）

問九　平成5年（1993年）に、学会が御形木御本尊（日寛上人書写）を全世界の会員に授与していくことを決定した正統性を、御書を以って答えなさい。

此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王真如の都とは申すなり、十界具足とは十界一界もかけず一界にあるなり、之に依つて曼陀羅とは申すなり、曼陀羅と云うは天竺の名なり此には輪円具足とも功徳聚とも名くるなり、此の御本尊も只信心の二字にをさまれり（『日女御前御返事』1244ページ・大白107ページ）

問十　日興上人の根本精神は、どのような遺誡であるかを答えなさい。

未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事（『日興遺誡置文』1618ページ・大白109ページ）

法梅蓮の

教学試験発心教材⑮ ／ 日顕宗を破す㈡ 解答例

〈青年部教学試験２級対応版〉

日顕宗について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一　法主や学僧が誤りを犯した場合、どのように対処すべきかを御書を以って答えなさい。

先師の如く予が化儀も聖僧為る可し、但し時の貫首或は習学の仁に於ては設い一旦の嫐犯有りと雖も衆徒に差置く可き事（『日興遺誡置文』1619㌻・大白111㌻）

問二「血脈」について、①妙法を自らの当体として信受する信心、②絶対不退の信心の持続、③異体同心に広宣流布を目指す信心、以上の3点について大聖人はどのように仰せになられておられるかを答えなさい。

①＝久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり（御書1337㌻・大白113㌻）

②＝過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり（同㌻）

③＝総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か（同㌻）

問三「三宝義」について、日顕宗はどのように主張しているかを答えなさい。

「末法下種の僧宝＝歴代法主」とすり替え、日顕への信伏随従を強要し、さらに「三宝一体義」を乱用し、法主・日顕が、「仏宝・日蓮大聖人、法宝・大御本尊と一体」であるかのように述べている。（大白114㌻）

問四　日蓮大聖人と日興上人は、僧侶の在り方について、どのように仰せになられているかをそれぞ答えなさい。

大聖人＝但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ（『曽谷殿御返事』1056㌻・大白117㌻）

日興上人＝先師の如く予が化儀も聖僧為る可し（『日興遺誡置文』1619㌻・大白　同㌻）

問五　日蓮大聖人は仏法利用の悪侶について、どのように仰せになられているか、三つ答えなさい。

出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道が弟子なりと仏記し給へり（『佐渡御書』958㌻・大白177㌻）

謗法の者を責めずして徒らに遊戯雑談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生なり（『松野殿御返事』1386㌻・大白　同㌻）

法を壊ぶる者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり（『立正安国論』26㌻・大白　同㌻）

問六　日顕宗が主張している数々の邪義ついて、御書を用いてそれぞれ破折しなさい。

㈠「学会が授与する御本尊は、法主の『開眼』がないから功徳がない」と喧伝していること。

一閻浮提総与」の御本尊である「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裹み末代幼稚の頸に懸けさしめ給う（『観心本尊抄』254㌻・大白108㌻）

㈡「本仏大聖人、戒壇の大御本尊、歴代の御法主上人が、その内証において、一体不二の尊体にましますという法主絶対論・法主信仰。

法主が御本尊、また日蓮大聖人と一体不二の尊体であるなどという教義は大聖人、日興上人に背く邪義であり、後の時代に、法主が仏法に違背して己義を構える事態があることを想定された日興上人が、次のように厳しく戒められた。「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えばこれを用う可からざる事（『日興遺誡置文』1618㌻・大白110㌻）

㈢　平成2年12月、学会に送られたきた宗門総監名での公式文書の中の「あたかも僧俗がまったく対等の立場にあるように言うのは、信徒としての節度・礼節をわきまえず、僧俗の秩序を失うものである」という僧俗差別。〈二御文〉

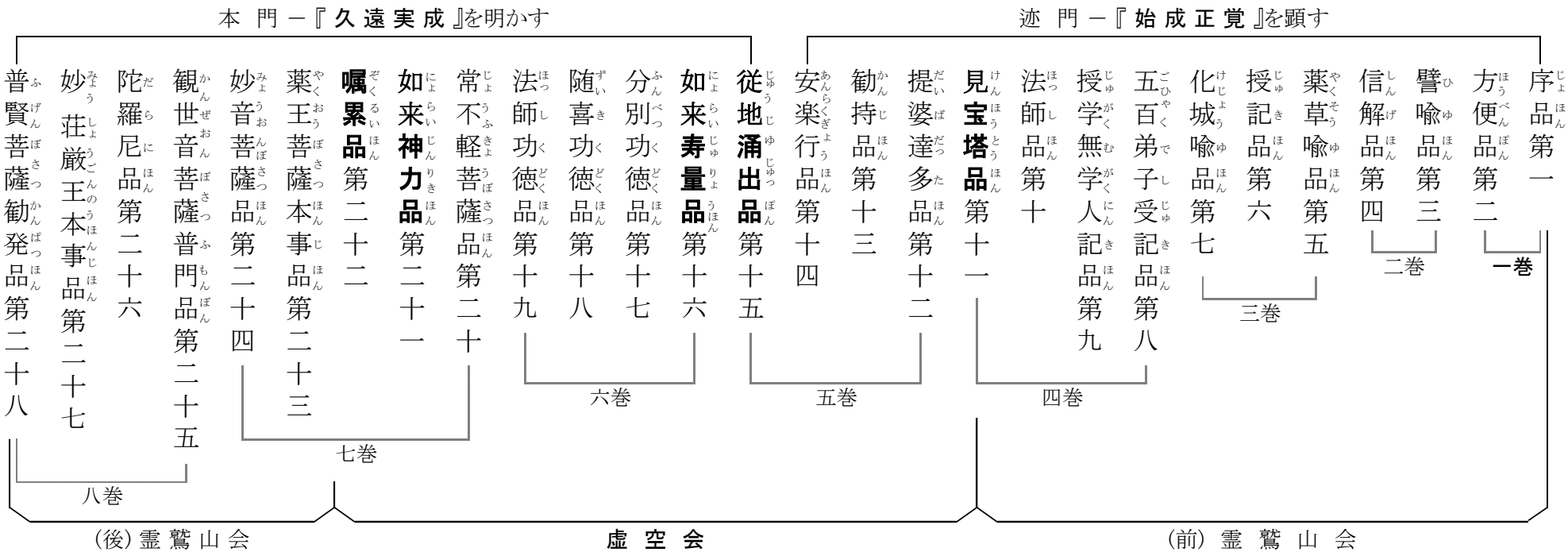
此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ（『四条金吾殿女房御返事』1134㌻・大白115㌻）

法師品には若是善男子善女人乃至則如来使と説かせ給いて僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり（『椎地四郎殿御書』1448㌻・同㌻）

㈣　平成3年10月、学会宛てに送付された宗門総監名での葬儀に関する「通告文」なる文書の中の「僧侶を呼ばずに葬儀を行えば、即身成仏どころか必定堕地獄となります」という化儀の悪用。〈二御文〉

されば過去の慈父尊霊は存生に南無妙法蓮華経と唱へしかば即身成仏の人なり（『内房女房御返事』1423㌻・大白116㌻）

故聖霊は此の経の行者なれば即身成仏疑いなし（『上野殿後家尼御返事』1506㌻・大白　同㌻）



『虚空会』での説法のあらすじ

宝塔品…巨大な塔〔宝塔〕が出現し，仏の滅後の弘教の難しさを説き，菩薩たちへ弘教の決意を促(うなが)す。

提婆達多品…「悪人成仏」・「女人成仏」を説く。

勧持品…菩薩たちが迫害を恐れずに弘教することを誓う。

安楽行品…法華経を弘(ひろ)める方法を説く。

涌出品…無数の地涌の菩薩が大地を割って躍り出てくる。

寿量品…釈尊が「永遠の仏」を説く。

分別功徳品～法師功徳品…弘教による功徳を説く。

不軽品…「法華経を弘める者」の福徳と，その「弘教者」を毀(そし)る者の罪を説く。

神力品…地涌の菩薩に仏の滅後の弘教を託(たく)す。
⇒別付嘱(べつふぞく)〔結要(けっちょう)付嘱ともいう〕

嘱累品…すべての菩薩・諸天に託す⇒総付嘱(そうふぞく)

『虚空会の儀式』⇒ 仏の滅後において，「弘教を“だれ”に託すか」ということを明らかにする付嘱の儀式なのである。

実は，宝塔品の中程から嘱累品の終わりまでに説かれているこの『虚空会の儀式』は，“おとぎ話”なんかないのです。私たちが御本尊の前に端座し，勤行・唱題する姿こそ『虚空会の儀式』なのです。そして，この時御本尊に広宣流布の誓いを立てることこそが「付嘱の儀式」なのです。

『法華経の智慧／第5巻』で池田先生は，―付嘱の儀式を通して，末法に，この御本尊を所持している「人」を指し示し，最大に称賛したのです。(中略)「二処三会」には，深い意義があった。それは法華経全体の構成によって，「現実の世界から『永遠の生命の世界』へ」(霊鷲山から虚空会へ)，そしてまた「現実の世界へ」(虚空会から霊鷲山へ)という“人間革命のリズム”を示している。(p.322～325)

【参考資料】

◆ 六難九易 ～ 見宝塔品第十一

九つの易しいことは、本来なら大難事ではあるが、仏滅後において法華経を受持する六つの行いの方がはるかに難しいことと説き示している。

諸余経典　数如恒沙　雖説此等　未足為難　①
若接須弥　擲置他方　無数仏土　亦未為難　②
若以足指　動大千界　遠擲他国　亦未為難　③
若立有頂　為衆演説　無量余経　亦未為難　④
若仏滅後　於悪世中　能説此経　是則為難　⑤
仮使有人　手把虚空　而以遊行　亦未為難　⑥
於我滅後　若自書持　若使人書　是則為難　⑦
若以大地　置足甲上　昇於梵天　亦未為難　⑧
仏滅度後　於悪世中　暫読此経　是則為難　⑨
仮使却焼　担負乾草　入中不焼　亦未為難　⑩
我滅度後　若持此経　為一人説　是即為難　⑪
若持八万　四千法蔵　十二部経　為人演説　⑫
令諸聴者　得六神通　雖能如是　亦未為難　⑬
於我滅後　聴受此経　問其義趣　是則為難　⑭
若人説法　令千万億　無量無数　恒沙衆生　⑮
得阿羅漢　具六神通　雖有是益　亦未為難　⑯
於我滅後　若能奉持　如斯経典　是則為難　⑰

諸余の経典は　数恒沙の如し　此れ等を説くと雖も　未だ難しと為すに足らず
若し須弥を接って　他方の　無数の仏土に擲げ置かんも　亦た未だ難しと為さず
若し足の指を以て　大千界を動かし　遠く他国に擲げんも　亦た未だ難しと為さず
若し有頂に立って　衆の為めに　無量の余経を演説せんも　亦た未だ難しと為さず
若し仏の滅後して　悪世の中に於いて　能く此の経を説かば　是れは則ち難しと為す
仮使い人有って　手に虚空を把って　以て遊行すとも　亦た未だ難しと為さず
我が滅後に於いて　若しは自らも書き持ち　若しは人をしても書かしめば　是れは則ち難しと為す
若し大地を以て　足の甲の上に置いて　梵天に昇らんも　亦た未だ難しと為さず
仏の滅度の後に　悪世の中に於いて　暫くも此の経を読まば　是れは則ち難しと為す
仮使い却焼に　乾ける草を担い負いて　中に入って焼けざらんも　亦た未だ難しと為さず
我が滅度の後に　若し此の経を持って　一人の為にも説かば　是れは則ち難しと為す
若し八万　四千の法蔵　十二部経を持って　人の為めに演説して
諸の聴かん者をして　六神通を得しめんも　能く是の如くすと雖も　亦た未だ難しと為さず
我が滅後に於いて　此の経を聴受して　其の義趣を問わば　是れ則ち難しと為す
若し人は法を説いて　千万億　無量無数　恒沙の衆生をして
阿羅漢を得　六神通を具せしめんも　是の益有りと雖も　亦た未だ難しと為さず
我が滅後に於いて　若し能く　斯の如き経典を奉持せば　是れは則ち難しと為す

〈妙法蓮華経並開結390ページ～392ページ〉

《現代語訳》

① 多くのそれ以外の経典は、その数がガンジス河の砂のごとく多数ある。これらを説いても、まだ難しいとなすには足りない。
② もしも須弥山を取って、他方の無数の仏国土に、投げ置こうとすることも、またまだ難しいとはしない。
③ もしも足の指をもって、三千大世界を動かして、それを遠く他国に投げることも、またまだ難しいとはしない。
④ もしも有頂天（宇宙の頂点）に立って、人々のために、無量のそれ以外の経典を演説しても、またまだ難しいとはしない。
⑤ （けれども）もしも仏の入滅したのちに、悪世に中において、よくこの経を説くことがあるならば、
これこそすなわち難しいとするのである。
⑥ たとえあるひとが手に虚空をとらえて、そうしてあちらこちら遊行しても、またまだ難しいとはしない。
⑦ （けれども）わたくしが入滅したのち、もしくはみずから書いて受持し、もしくはひとに書かせるならば、
これこそすなわち難しいとするのである。
⑧ もしも大地をもって、足の爪の上に置いて、そうしたまま、梵天にのぼって行くとしても、またまだ難しいとはしない。
⑨ 仏が入滅したのちに、悪世の中において、暫くでも、この経を読むならば、これこそすなわち難しいとするのである。
⑩ たとえ世界の破壊である却のはじめのころに大火災がおこっているときに、乾いた草を背中に荷って行って、
その火の中に入っても焼けないというのも、またまだ難しいこととはしない。
⑪ わたくしが入滅したあとに、もしもこの経を受持して、一人のためでもこの経を説くならば、これこそすなわち難しいとするのである。
⑫ もしも八万四千という仏教全体の教えの蔵と、十二部経とを受持して、ひとのために演説し、
⑬ 多くの聴くものに、六神通を獲得させるならば、よくこのようにしたとしても、またまだ難しいとはしない。
⑭ わたくしの入滅したのちにおいて、この経を聴いて受持し、その意義趣向を問うならば、これこそすなわち難しいとするのである。
⑮ もしもあるひとが法を説いて、千万億の、無量無数で、ガンジス河の砂の数ほど多数の生あるものたちを、
⑯ みな聖者の位を得て、六神通をそなえさせるならば、その利益はそれだけあるとはいっても、またまだ難しいとはしない。
⑰ わたくしが入滅したあとにおいて、もしもよく、このような経典を受持し尊ぶならば、これこそすなわち難しいとするのである。

［余経説法易］
［須弥擲置易］
［世界足擲易］
［有頂説法易］
［広説此経難］
［把空遊行易］
［書持此経難］
［足地昇天易］
［暫読此経難］
［大火不焼易］
［少説此経難］
［広説得通易］
［聴受此経難］
［大衆羅漢易］
［受持此経難］

【参考資料】

◆三類の強敵～勧持品第十三『二十行の偈』

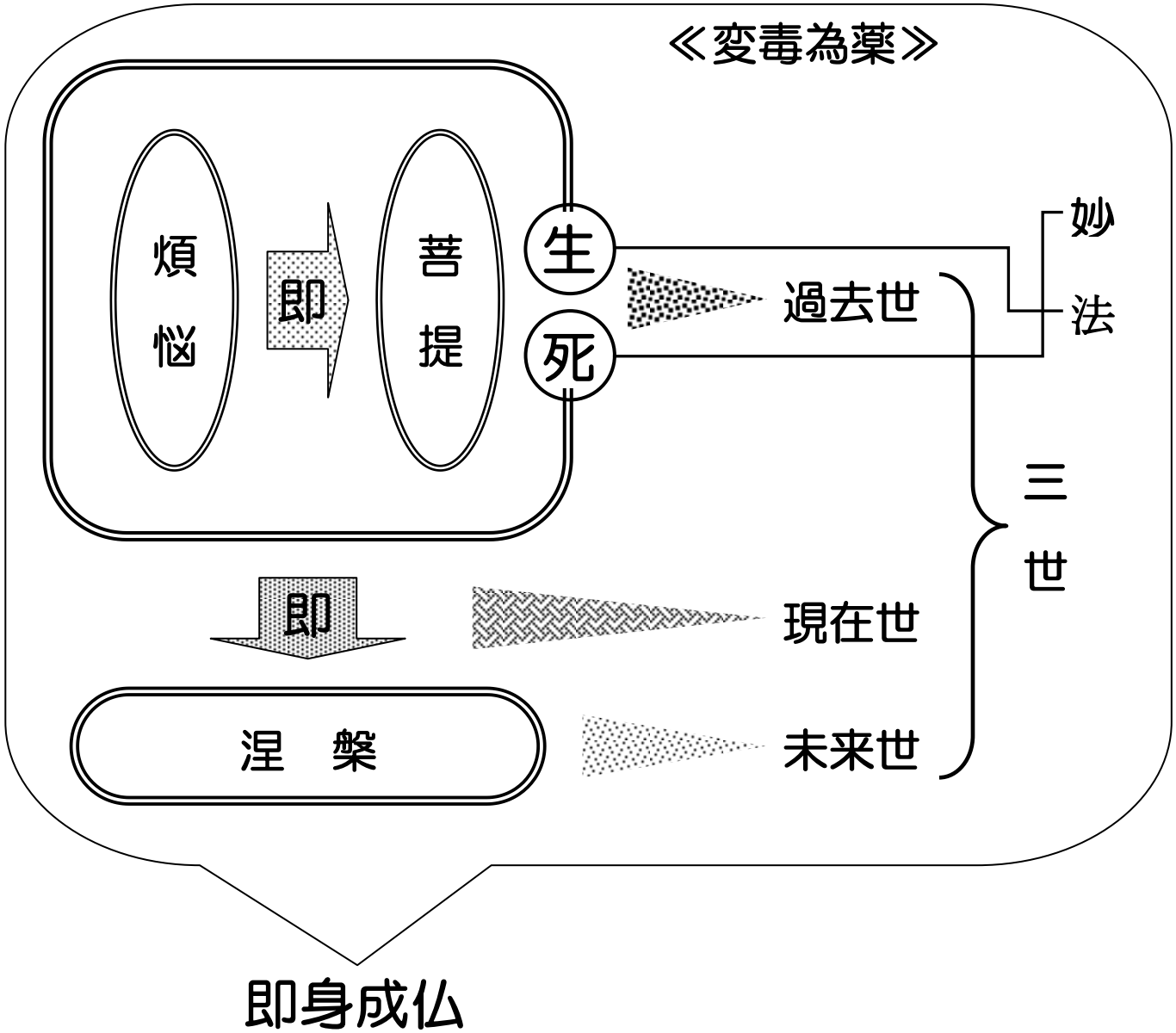
末法悪世の時代に、法華経を弘める者には必ず「三類の強敵」が出現することが示されている。

唯願不為慮　於仏滅度後　恐怖悪世中　我等当広説
有諸無智人　悪口罵詈等　及加刀杖者　我等皆当忍
悪世中比丘　邪智心諂曲　未得謂為得　我慢心充満
或有阿練若　納衣在空閑　自謂行真道　軽賤人間者
貪著利養故　与白衣説法　為世所恭敬　如六通羅漢
是人懐悪心　常念世俗事　仮名阿練若　好出我等過
而作如是言　此諸比丘等　為貪利養故　説外道論議
自作此経典　誑惑世間人　為求名聞故　分別説是経
常在大衆中　欲毀我等故　向国王大臣　婆羅門居士
及余比丘衆　誹謗説我悪　謂是邪見人　説外道論議
我等敬仏故　悉忍是諸悪　為斯所軽言　汝等皆是仏
如此軽慢言　皆当忍受之　濁　却悪世中　多有諸恐怖
悪鬼入其身　罵詈毀辱我　我等敬信仏　当著忍辱鎧
為説是経故　忍此諸難事　我不愛身命　但惜無上道
我等於来世　護持仏所嘱　世尊自当知　濁世悪比丘
不知仏方便　随宜所説法　悪口而嚬蹙　数数見擯出
遠離於塔寺　如是等衆悪　念仏告勅故　皆当忍是事
諸聚落城邑　其有求法者　我皆到其所　説仏所嘱法
我是世尊使　処衆無所畏　我当善説法　願仏安穏住
我於世尊前　諸来十方仏　発如是誓言　仏自知我心

①唯願わくは御心配なさいませんように。仏が入滅されてから後、恐ろしい怖れのある悪世の中に於いて、我らは当に広く説くであろう。
②多くの無知の人が悪口をいい、罵り及び刀杖を加える者があろうとも、我らは皆当にそれを忍ぶであろう。
③悪世の中の比丘は、まちがった智をもっていて、心にこび諂(へつら)いがあり、まだ得ていないものを、すでにこれを得たと思い、我執の心が充満しているであろう。
④あるいは山林の静かな場所で、ボロ切れを継ぎ接ぎした衣を着て、誰もいないところにいて、自ら真実の道を行じていると思って、人間を軽んじ賤しめている者があるであろう。
⑤財産を貪り自己の利益を求めることに貪著しているが故に、在家の人々のために法を説いて、世間から恭敬されることが、六神通を得た阿羅漢(聖者)の如くであろう。
⑥この人が悪心を懐いて、常に世俗のことばかり心にいつも思い、その名前のうえで、山林の静かな場所に住んでいるということをよりどころにして、我らの過失を数えあげることを好んでいる。
⑦しかもこのような言葉をいう、「この多くの比丘たちは、財産を貪り、自己の利益を求めることに貪著しているがために、外道の論議を説き、
⑧自らこの経典を作成して、世間の人を誑(たぶら)かし惑わせ、名聞を求めようとするがための故、分別してこの経を説くのである」と。
⑨このように常に大勢の人々の中で、我らをそしろうと欲するので、国王･大臣･バラモン･在家の人々、
⑩及びその他の比丘たちに向って、我らを非難して悪口をいい、我らの悪を説いて、「これはまちがった考えの人である。外道の論議を説いている」という
〔第三類　僭聖増上慢〕
⑪我らは仏を敬いたてまつるが故に、悉くこの多くの悪を忍ぶのであろう。彼らの為に軽んぜられて、「汝らは皆これ仏なのだ」といわれても、
⑫このような軽蔑した高慢な言葉を、皆当に我らはじっと忍耐して受けるであろう。濁りに満ちた却という悪世の中には、多くの恐ろしい怖れがあるであろう。
⑬悪鬼がその身の中に入ったような人は、我を罵り、そしり･辱めるであろうけれども、我らは仏を敬い信じたてまつることによって、必ず当に忍耐の鎧を身につけるであろう。
⑭この経を説かんがための故に、この多くの困難なことがらに耐え忍ぼう。我は一身の命を愛するのではなく、ただ無上の仏道だけを惜しんでいるのである。
⑮我らは来世に於いて、仏に委嘱されたところを護持しよう。世尊は自ら当に御存知であろう。濁りに満ちた世の悪い比丘は、
⑯仏が教化の方法として、ふさわしいように相手に応じて説かれる法を知らないで、悪口をいい眉を顰(しか)め、経を受持する者がしばしば追放されて、
⑰塔や寺から遠く離れさせられてしまう。
このような多くの悪をも、仏の御告げをじっと心に思うが故に、皆当にこれらのことがらを忍ぼう。
⑱多くの聚落や城市に、もしも法を求める者があるならば、我らは皆そのところに到り、仏に委嘱された法を説こう。
⑲我は世尊の使者であるから、多くの人々に対処しても畏れるところはない。我は当に善く法を説こう。願わくは仏よ、安穏にとどまっておられますように。
⑳我は世尊の前と、多くの来集された十方の仏の前とで、以上のような誓願の言葉を発した。仏よ、どうか我の心を知られますように。

《現代語訳》

唯だ願わくは御心配なさいませんように。仏が入滅されてから後、恐ろしい怖れのある悪世の中に於いて、我らは当に広く説くべし
諸の無智の人の　悪口罵詈等し　及び刀杖を加うる者有らん　我れ等は皆な当に忍ぶべし
悪世の中の比丘は　邪智にして心諂曲に　未だ得ざるを謂いて得たりと為し　我慢の心充満せん
或は阿練若に　納衣にして空閑に在って　自ら真の道を行ずと謂いて　人間を軽賤する者有らん
利養に貪著するが故に　与白衣の為に法を説いて　世の恭敬する所と為ること　六通の羅漢の如くならん
是の人は悪心を懐き　常に世俗の事を念い　名を阿練若に仮って　好んで我れ等が過を出さん
而も是の如き言を作さん　此の諸の比丘等は　利養を貪らんが為めの故に　外道の論議を説く
自ら此の経典を作って　世間の人を誑惑す　名聞を求めんが為めの故に　分別して是の経を説くと
常に大衆の中に在って　我れ等を毀らんと欲するが故に　国王大臣　婆羅門居士
及び余の比丘衆に向って　誹謗して我が悪を説いて　是れ邪見の人　外道の論議を説くと謂わん
我れ等は仏を敬うが故に　悉く是の諸悪を忍ばん　斯れの軽しめて　汝等は皆な是れ仏なりと言う所と為らん
此の如き軽慢の言を　皆な当に忍んで之を受くべし　濁却悪世の中には　多く諸の恐怖有らん
悪鬼其の身に入って　我れを罵詈毀辱せん　我れ等は仏を敬信して　当に忍辱の鎧を著るべし
是の経を説かんが為めの故に　此の諸の難事を忍ばん　我れは身命を愛せず　但無上道を惜しむ
我れ等は来世に於いて　仏の嘱する所を護持せん　世尊は自ら当に知しめすべし　濁世の悪比丘は
仏の方便　宜しきに随って説きたまう所の法を知らず　悪口して嚬蹙し　数数擯出せられ
塔寺を遠離せん　是の如き等の衆悪をも　仏の告勅を念うが故に　皆な当に是の事を忍ぶべし
諸の聚落城邑に　其れ法を求むる者有らば　我れ皆な其の所に到って　仏の嘱する所の法を説かん
我れは是れ世尊の使なり　衆に処するに畏るる所無し　我れは当に善く法を説くべし　願わくは仏よ安穏に住したまえ
我れ世尊の前　諸の来りたまえる十方の仏に於いて　是の如き誓言を発す　仏は自ら我が心を知しめせ

〈妙法蓮華経並開結417ページ～421ページ〉

『煩悩即菩提』と『生死即涅槃』の図解